

青橋由高

illustration 梢日向

ADULT ONLY

成人向

ダブルスコア

このダメ大人っ!

青橋商店

AOHASHI NOVELS

Story

「ダメ人間！ ロリコン！ 社会不適合者！」
一回り以上も歳下の少女・佳奈の罵声が、元
ニートで引きこもりの涼太を襲う。

「俺はもう教師だ、ダメ人間じゃねえ！」

なぜか佳奈の通う学校で教師に採用された涼
太だが、佳奈の機嫌はいつに増しても悪い。

「犯罪に走ったりしたら許さないわよ、このオ
タク！ 殺すからね！」

しかし、口とは裏腹に毎日涼太の部屋を訪れ
る佳奈と、遂に一線を越えてしまう。

「こ、このダメ大人あ！ 教え子に手をつける
なんて……アンタ、最低よお！」

スク水で、制服で、そしてミニスカサントで。
歳の差カップルの甘々な日常、開幕！

「ダブルスコア〜このダメ大人っ！」

青橋由高

(著)

・ 稍日向

(イラスト)

プロローグ〜わかってるでしょうね！

第一章〜このロリコン！

第二章〜この変態！

第三章〜このダメ大人っ！

エピローグ〜捨てたら承知しないんだから！

後日談

オリジナル版あとがき

電子版あとがき

159

156

148

144

104

73

18

5

プロローグはわかってるでしょうね！

まず最初に言っておきたいことがある。

俺はラブコメやエロゲの主人公どものようにあり得ないくらい鈍感だったり、据え膳をスルーしまくるほど軟弱でも聖人君子でもない。

自分に向けられた感情にはそこそこ敏感なつもりだし、結婚する相手以外とエロいことをしちゃいけないなんてことも考えてない。

だから、悪友どもの無責任な発言に対しては、いつも同じセリフを返すことにしている。

「残念ながら、佳奈^{かな}はお前らの期待するようなツンデレの類じゃない。夢を見るな。夢は寝ながら見るもんだ」

好きだから意地悪しちゃう？　好きだからついキツイ言葉を吐いてしまう？

違うね。

あいつは単純に俺をバカにしてるだけだ。心の底から俺を軽蔑してるだ

けなんだよ。

俺もそうなのかって？

俺が佳奈に対して素っ気ない態度をとったり、あいつを子供扱いするのは、やっぱり本気であの娘を疎ましいと思ってるからなのか、だって？

あのな、俺はもう三十路をとくに過ぎたおっさんなんだ。ザ・中年だ。

あいつは、佳奈はまだ学生なんだぜ？ 一回り以上離れた遠縁のガキなんだぜ？

確かに俺は大学受験に失敗したし留年もしたし卒業したあとでも限りなくニートに近いフリーターだったし、プチ引きこもりのベテランでもある。

だがな、俺は大人だ。分別もあるつもりだ。

繰り返す。

俺は大人だ。

だから——本心を隠すことなんて、朝飯前なんだよ。

まず最初に言っておきたいことがあるわ。

私はマンガやギャルゲに出てくるヒロインたちのように、鈍感でヘタレで軟弱な偽善者のような男に惚れるほどガキじゃないの。

自分は感情表現が上手だと思おうし、ホントに好き合っていればキスだってその先のことだって許してあげてもいいと考えてる。

だから、友人たちの無責任な発言に対しては、いつも同じセリフを返すことにしているわ。

「残念だけど、リョータはあなたたちの期待するような大人の男性なんかじゃないわ。アレはホントにダメ人間なの。社会不適合者なのよ」

織細だから人見知りする？ 優しいから人付き合いが下手？

違うわ。

アイツはただの臆病者。根性なし。意気地なし。甲斐性なしなだけよ。

だからいつもリョータをイジメてるのかって？ 嫌いだから鬨るのかって？

あのね、私はもう大人よ？ 立派な女なのよ？

確かに身長は人より低いし、胸の起伏も少々慎ましやかだけど、ちゃんと大人の女なんだから。

あのダメ男は本気の本気でどうしようもないヤツだけど、私は生まれてからずっとリョータを見てきたんだから。

ずっと。ずっとよ？

繰り返すわよ。

私はずっとずっとずっとあのダメ大人を見つめてきたの。

だから——仕方ないから、いざとなったら私が引き取ってあげてもいいのよ？

「あーあ、今日から仕事か……かったりい……」

いつきりようた
五木 涼太は慣れないネクタイをいじりながら、とぼとぼと、この爽や

かな春の朝に相応しくない暗い顔で歩いていた。

涼太はとっくに三十代を迎えてしまった独身男だ。

そこそこの名の知れた大学を一浪一留したもののどうにか卒業したのだが、真面目に就職活動をせず、そのままフリーターになった。

無気力で自堕落な、けれど自由気ままな生活は、しかし、もう終わって

しまったのだ。

「涼太、お前、来月からウチの教員だから」

先月、突然涼太の部屋に押しかけてきた祖母はいきなりそう告げた。

「……は？」

「あんた、教員資格持ってるでしょ？ 来月からウチで教師やりなさい」

この祖母はとある私立学校の名誉理事を務めており、そのコネで涼太を強引に採用させたらしい。

これが両親や他の親戚であれば断るところだが、

(俺、祖母ちゃんにだけは頭が上がらないからなあ)

子供の頃からお祖母ちゃん子だった涼太にそれはできなかつた。

定職にも就かずふらふらしていた涼太をずっと見守ってくれた数少ない血縁者でもある祖母の好意は、とてもじゃないが拒めない。

(でも、なんでこんな急に……)

涼太のその疑問には、祖母は答えてはくれなかつた。

ただ、なんだか妙に楽しそうな顔をしていたので、きっとよからぬことを企んでいるのだろう。祖母はそういう悪戯好きのところもあるのだ。

「うああ、無駄に空が青い……」

面接などで何度か訪れたことのある学校の門をくぐったところで一度立ち止まり、空を見上げる。青い空と白い雲が嘘みたいに綺麗だった。

少しだけ、ほんの少しだけ、重かった心が軽くなった気がする。

だが、その効果は僅か数分後に打ち消されてしまう。

「リョータ、ホントに来たんだ？」

職員用の昇降口で靴を履き替えていると、見慣れた顔の人物が声をかけてきた。

「……佳奈か」

今回の就職で涼太が最も頭を痛めている問題が、そこに立っていた。

山之内佳奈。

涼太の母方の従姉妹にあたるその少女はここの学生なのだが、

「なによ、そのイヤそうな顔は!? 私みたいな美少女に声をかけられたんだから、もっと嬉しそうな顔しなさいよね、ダメリョータ!」

学校でもこのキツイ物言いは変わらないらしい。

「俺、一応教師だからな?」

やんわりと、少しげんなりもしながら釘をさしておく。

「わかってるわよ、アンタなんか言われなくても！」

佳奈に罵倒されるのは慣れてるので、今さら腹も立たない。

言い返さないから余計にひどい言葉をぶつけられ、それにも慣れてしま
うという悪循環だ。

「世も末よね、リョータのようなニートで引きこもりのダメ人間がこの名
門女子校の教師になるなんてね！」

「ああ、俺もそう思うな」

事実なので言い返さないでおくのだが、佳奈はその態度が気に食わない
らしい。

「アンタ、わかってるでしょうね？」

行く手を阻むように涼太の前に立ちはだかり、片眉を上げて睨んでくる。

「おい、俺はこれから祖母ちゃんに、」

「話はまだよ！ リョータのクセに生意気なのよ！」

どん、と思いい切り胸を突き飛ばされた。小柄な佳奈であっても不意を衝
かれたので、涼太は少しバランスを崩す。

「なんだよ、いきなり!」

「理事長室に行くより大事なことあるでしょ! このダメ大人!」

「へ?」

軽く頬を膨らませた少女に叱られてしまう中年男。

佳奈は軽く脚を開くと片手を腰に当てるというポーズをとると、なにかもの言いたげな目で涼太を見た。

(ああ、なるほど)

長い付き合いなので、佳奈がなにを求めてるかはすぐにわかった。

「悪くないんじゃないか? その制服、似合ってるぞ」

「そ、そうかな? 可愛い?」

ここで肯定しておかないと肉体的精神的に様々な攻撃を加えられるので、

「ああ。いい感じだ」

大人しく褒めておくことにする。

実際、素直にそう思えるほどに初めて見る佳奈の制服姿は可愛かった。

(下手に可愛いなんて口にしたらつけあがりやがるから言わねーけどな)

これでいいだろ、満足しただろ、と軽く手を振ってから、改めて理事長

室へと向かう。祖母に挨拶をしなくてはならないのだ。

「あ、こら、逃げるな、リョータ！」

「ぐえっ！」

ネクタイを引っ張られた喉がひどい声を上げる。

久々に引っ張り出してきたよれよれのネクタイが、その老い先短い寿命をさらに削られてしまう。

「な、なにしゃがる！ 殺す気か!？」

「ま、まだ私の用件が終わってないのに勝手に行こうとするからでしょ、バカリョータ！」

「こ、この……ん？」

さすがになにか言い返してやろうかと思った涼太だったが、急に辺りをきよろきよろし出した佳奈の様子に気づく。

今日は初日ということだから早く来ているし、そもそも学生が登校する時間ではない。周囲に人の気配は皆無だ。

(そーいやこいつ、どうしてこんな時間に学校にいるんだ?)

そんな疑問を抱く涼太の前で、佳奈はなぜか顔を赤らめ始めた。

「リョータ、アンタ、わかってるよね？」

「なにがだ？」

「ここ、一応は名門の女子校なのよ？」

「ああ、わかってるが？」

「周りはみんな女子校生。ロリコンのリョータにとっては守備範囲外ってわかってるけど、一応、念のため、もう一度だけ忠告しておくわ。……犯罪だけはするんじゃないわよ？」

「ひでえ言われようだな、おい」

「事実だから」

「ちょっと待て。どうして俺がロリコンだと決めつける」

「リョータの部屋見れば一目瞭然」

即座に言い返せない時点で涼太が劣勢。

それでもなにか反論しなくては、と焦る脳に、予想外の映像が飛び込み、思考を混乱させる。

「ね。私の制服姿、可愛いんでしょ？」

佳奈が、ただでさえ短いスカートをゆっくり捲り始めたのだ。

細い脚を包むフリル付きのオーバーニーソックスとスカートのあいだの絶対領域が徐々に、しかし確実にその面積を拡大していく。

(おおおお!?)

条件反射で見えてしまう。凝視してしまう。ガン見してしまう。

だが、佳奈はパンツが見えるか見えないかギリギリのところまで手を止める。

まさに寸止め。生殺し。焦らしプレイ。

「ほら、ロリコンじゃないの。変態リョータ」

蔑む視線とセリフが投げつけられるが、その潤んだ瞳と紅潮した頬が本気で涼太を責めてるわけじゃないことを示している。

「お、お前がいきなり、」

「私くらい可愛い女の子は他にはいないけど、アンタ、節操ないからね。気をつけなさいよ？ 新聞沙汰になったら……殺すからね、本気で」

一瞬、凶悪な光がその目に宿る。

「するわけねーだろ」

「どーだか」

佳奈の顔には疑念の色がありありと浮かんでいた。

「安心しろ、佳奈」

ぽん、とその頭に手を置き、軽く撫でてやる。

「お前や祖母ちゃんに迷惑はかけねーから」

「……ふんっ」

まるでもつと撫でろ、とでもいうようにぐっと頭を寄せてくるので、そのリクエストにも応えてやる。

「もしも」

「ん？」

「もしもアンタが……性犯罪へのリビドーが抑えきれなくなったら、真っ先に私に報告しなさいよ？」

なでなでされたまま、小声でそんなことを言ってきた。なぜか耳が赤い。「そんなことにはならねーだろうけど……まあ、了解、だ」

お前に報告したからどうなるもんでもないだろ、という言葉を呑み込み、「じゃ、俺、祖母ちゃんところに行ってくるから。またな」

もう一度ぽん、と軽く頭を叩いてから、佳奈から離れる。

「あ……」

一瞬、佳奈が寂しそうな顔をしたように見えだが、

「ふんっ。せいぜい初日にクビにならないよう気をつけるのね、このダメ大人っ！」

背中に浴びせられる罵声はいつもと変わりなかった。

第一章 このロリコン！

青い空！ 白い雲！ 輝く海！ そして———ロマンス！

……などとは一切関係のない夏を涼太（三十代・独身）は過ごしていた。夏休みもすでに十日以上過ぎているが、この間、涼太の行動範囲は学校と自宅、それと駅前のショッピングセンター（主に書店）のみである。

「夏だ、海だ、ロマンスだあ？ けっ。そんなの新任教師にゃ関係ねーよ。ただ暑いだけじゃねーか、こんちきしょー！」

自室の窓から見える入道雲に向かって叫ぶと、

「うっさいわよ！ 近所迷惑でしょ、このダメ教師！」

背後からクッションを投げつけられた。

「いってえ!? お前、いきなりなにすんだよ!？」

「うるさいからうるさいって言ったのよ、この引きこもりがッ」

無論、犯人は佳奈しかいない。

白いワンピースのままベッドの上であぐらをかいている。丈が短いから、

ちょっと動けば下着が見えてしまいそうな際どい格好だ。

「引きこもりじゃねえ！ 確かに昔、ちょっとだけそんな時期もあったかもしれないが、今は社会人だ！」

「何年も引きこもっていてちよっととか言うな！」

「ぐう!？」

その通りだったので、涼太が一瞬口籠もる。

そして、その一瞬を見逃すほどの少女は甘くはなかった。

「ちょっと女に振られたくらいで受験に失敗するわ、そのせいで二次元の世界に逃避するわ、しかもオタク趣味にハマったせいで留年するわ、そのままニートで引きこもるわ、アンタ、最っ低じゃないの！」

歳上の親戚、しかも一応は教師である相手に対して、その口撃には一切の手加減がない。滅多切りである。

「お、お前……もうちよっとオブラートに包んでもいいだろ……？」

「はっ！ 全部事実じゃないのよ！」

佳奈の言うとおり、涼太は浪人も留年もしたし、就職もしなかった。

「だ、だけどな、俺、お前に迷惑はかけてねーだろ？ 親に言われるなら

わかるさ。悪いことしたって今は反省してる。だからその罪滅ぼしとして教師を頑張ろうって思ってたんだよ」

不安は山ほどあったが、どうにか一学期は乗り切れた。

自分ではひどい教師だったと思うが、周囲の評価は意外と悪くなかった。だからこの調子で引き続き頑張ろうと夏休み中も精力的に働いているのだ。

「私にも迷惑かけたでしょ！ どさくさでなにほざいてんのよ！」

「お前に迷惑かけられた覚えはあっても、かけた記憶はねえ！」

佳奈がガキの頃から知っているが、喋れるようになった途端「バカ」と言われたこと、十年以上経った今でも鮮明に覚えている涼太である。その後のことは推して知るべし、だ。

「ああぁ!? どの口がそんなこと言うのよ!? 私に迷惑かけてないだぁ!? ふざけんじゃないわよ！ 乙女の心を踏みにじったクセに！ このバカリョータ！」

「人聞きの悪いことを大声で叫ぶなっ。俺がいつお前の、あるのかどうかもわからないUMAみたいな乙女心を踏みにじったんだよ!?!?!?!?!え?」

普段と同じノリで言い合ってたつもり、だった。少なくとも涼太は本気でこの一回り以上も歳下の少女を罵る気はなかったのだが、

「おい……なに、泣いてんだよ……」

佳奈は、その大きな瞳に涙を湛えていた。そして、その今にも決壊しそうな目で涼太を憎々しげに睨んでいた。

（なんでだよ？　なんでお前が泣くんだよ!?　これじゃ……俺が悪者じゃねえか!）

基本的に男という生き物は女の涙への抵抗値が低い。特に涼太はその数値が限りなくゼロだった。

「お、おい佳奈……」

自分の部屋で十代の少女に泣かれておたおたする三十代の独身教師。端から見ると色々問題ある光景である。

「悪かったよ。なにが悪かったかわかんないけど……とにかく悪かった」理由も原因も不明だったが、とにかく謝ろうと佳奈に近寄った瞬間、

「ひ、人の気も知らないで……このダメ人間……死ね、死んで私に詫びろ、このクズ、劣等生命体がッ!」

「ふごツ!？」

涼太は飛んできた某ゲームの攻略本（総ページ千超。ほとんど辞書。ほとんども鈍器）を顔面に浴びるといふ悲劇に見舞われるのだった。

「いってええ……」

「わ、悪かったわよっ」

「骨、折れてねえだろうな……?」

「折れてたらもっとどばどば血が出てるわよっ」

「ひん曲がったまま元に戻らなかったら、お婿に行けなくなるな……」

「そんなときは私が……じゃ、じゃなくて、曲がってないし、たとえ曲がってなくてもリョータと結婚してくれる女なんてこの銀河系に存在してないわよっ」

その後、なにやらぼそぼそと「私以外は」とかなんとか言っていたような気がするが、涼太にはよく聞き取れなかった。

（うう、ひでえ目に遭った……）

ベッドから起き上がり、鼻に詰めたティッシュを取り出す。どうやら鼻血は止まったようだが、痛みは残っている。幸い、曲がってはいないようだが。

「……で？ お前、なにに腹立てたんだよ。俺、佳奈を怒らせるようなこと言ったか？ マジでわからんのだが」

目を赤くして唇を尖らせている少女に尋ねる。佳奈はベッドの端に座ったまま、脚をぶらぶら振っていた。

「……………」

「佳奈」

「だって……リョータ、私には迷惑かけてないなんてほざくんどもん」

佳奈に迷惑をかけたつもりはないのだが、それを口にすればさっきの繰り返しになるので、黙って続きを促す。

「リョータが引きこもってたあいだ、どこにも行けなかった」

「は？」

「プールも、海も、山も、遊園地も、映画館も、買い物も、ゼーンぶ行けなかった！ 貴重な青春のひとときだったのに！」

「……それ、俺のせいなのか？」

「当たり前でしょ!? アンタ、私が何度誘ってあげても全っ然だったじゃない！」

「そりゃ、その頃の俺は若干引きこもりだったしな」

実際のところ、ときどきは外出もしていたし、たまにバイトだってしていたのだ。完全無欠の引きこもりでもなければニートでもなかったのだ。

正確に言うならば、引きこもり気味の、あまり熱心でないフリーターだった、というのが一番近い。

胸を張って言えるようなことでないのだけは間違いないが。

「ほら、私に迷惑かけてるじゃないの、この社会不適合者ッ」

「威張れた人間じゃないのは否定しないが……それとお前の灰色の青春とにどんな因果関係があるんだよ？」

言われてみれば、確かに色々誘われた記憶はある。

毎日のようにこの部屋にやって来ては「人間のクズ」「脊椎動物のつまはじき者」「ダメ大人」などと散々罵られる合間に「遊園地連れてけ!」「

「海連れてけ!」「この際だ、秋葉原でもいいから私を連れて行け!」な

どと命令されてたような気もする。

「……あれ、もしかして本気だったのか？」

こくり。佳奈がふて腐れた顔のまま頷く。

だったら俺とじゃなくて友達と行けばよかっただろ……とはさすがに口にしな。それくらいのこととは涼太にもわかる。

「そっか。それは……悪かったな。すまん」

「謝るだけならケンミジンコにだってできる」

「俺はサル以下かよ!? ケンミジンコ、謝れねえよ!」

脊髓反射でツッコミを入れてしまうが、

「じゃあ、どうすりゃいいんだ？」

今日のところはどうか考えても涼太に勝ち目はないので、素直に白旗を揚げる。

「そこまで言うなら……アホなりョータにも汚名挽回のチャンスあげるわ」

汚名を挽回してどうするんだよ、というツッコミは我慢できなかったのだが。

それから十日後、涼太はデパートの水着売り場で嫌な汗をかいていた。「まったく、ホントにのろまでグズなんだから！ たったあれしきの仕事、三日もありや終わんでしょ!?!」

朝、家を出てからずっと文句を言い続けている佳奈は、しかし、上機嫌であれこれ水着を物色している。

「お前なあ……俺がああ書類を片付けるのにどれだけ苦労したか……」
涼太の目の下にはくっきりと隈ができています。この十日間、睡眠時間を削って仕事をしまくった代償だ。

教師の夏休みは、世間が思うほど楽ではない。

「だから海は諦めてプールで妥協してあげたんじゃないの！ 感謝しなさいよ、ダメ教師！」

アンタのせいでもどこにも行けなかった青春の穴埋めしなさい……と命じられたのだが、

「海外旅行！」

「俺、パスポート持ってないし、そもそもそんな金はねえ！」

「ボーナス出たでしょーが！ ウチの学校、そこそこ出るって聞いたわよ

!?

「新任教師に満額出るわきゃねーだろ!? 冬のボーナスならともかく!」

「じゃあ、沖縄!」

「遠い! 日帰りで行けるところにしろ!」

「イヤよ、そんなのつまんない! ホテルも、三つ星がいい!」

「バカ言ってるんじゃないかねえ! そんなホテルを二部屋も借りたらいくらかかると思ってるんだ!」

「……別に、一部屋でもいいけど」

なにやら危険な発言をしてたような気もするが、聞かなかったことにする。

「……じゃあ、妥協して、ホテルのプールでどうだ? 食事付きで」

「もう一声」

「……………水着も買ってやる」

「しかたないから、そこらへんで手を打ってあげるわ。感謝しなさいよね、甲斐性なしのダメ大人」

そんな遣り取りの結果がこの買い出しなのだが、

(高っ！ 水着、高っ！ なにこれ、女の水着ってこんなに高いのか!?)
マンガやゲームやアニメやラノベでよくそういうシーンがあったが、まさかここまでとは思わなかった。

(これ一着でBDボックス買えるじゃん！ ゲーム機買えるじゃん！ 最新のスマホに機種変できるじゃん！)

もちろん比較的安価なものもあるのだが、それでもメンズ水着に比べると倍以上する。しかも、

(あのバカ、高いヤツばっか手にとってねえか!? わざとか、わざとなんだな!? 俺のボーナスを全部取り取るだけじゃ飽き足らず、乏しい預金まで狙ってんだな!?)

涼太は頭の中で銀行口座とクレジットカードの残高を確認する。

(うう、本当なら来週の同人イベントで買い漁るはずだったのに……っ)
水着の他、ホテルでのプール・デイナー料金、そして交通費を考えると、かなりの額になる。

初めてのボーナスを両親ではなく、まさか親戚の少女に貢ぐ羽目になるとはさすがに想定外だった。

「じゃ、これにするわ。支払い、よろしくっ」

「げ」

そして佳奈が一時間以上吟味して選んだ水着の値札を見て、

(今年のイベントは……諦めよう……)

涼太は次の給料日までどうやって生き延びようかと算段を始めるのだった。

ただでさえ少ない時間と資金をやりくりして、さらにそこに体力と気力を注入してどうにかこうにか予定を立てた「一流ホテルのプールで泳いで食事して帰ってくる日帰りツアー」だったが、

「そーいやアイツ、遠足の前に熱を出すタイプだったけな……」

当日の朝、佳奈が高熱を出してことであっさりとお流れとなった。

「そうなのよー。あの娘、涼太ちゃんと久々に出かけるって浮かれまくってたから、心配はしてたんだけどねえ」

佳奈の母親はからからと笑いつつも、娘のために薬や食べ物を買って出

かける準備をしていた。

「ちよっと買い物行ってくるから、そのあいだウチのバカ娘、見てくれる？」

「いいですよ。どうせ一日暇になっちゃいましたから」

「あ、佳奈、弱ってるから、チャンスよ？」

佳奈母、なぜか小声になってニヤリと笑う。

見た目はあまり似てない母娘だが、こういうときはびっくりするくらいに雰囲気こそっくりになる。

「は？」

普段の仕返しをするチャンスという意味かと思ったが、どうも違いらしい。

なにか勘違いしてますよ、というセリフが喉から出かかったが、それを口にするより先に佳奈母は買い物に行ってしまった。

「一時間は帰らないから」

と、余計な一言を残して。

(佳奈の部屋に来るのも久し振りだな)

佳奈が涼太の部屋に来るばかりで、その逆は滅多にない。

「俺だ。入るぞ？」

しかし、返事はなかった。

(寝てるのか?)

一応もう一度だけノックしてから、そっとドアを開けてみた。

案の定、佳奈はベッドで静かに寝息を立てていた。

起こさぬよう足音を忍ばせて部屋に入り、この生意気で口の悪い少女の様子を窺う。

(顔、赤いな。熱、相当高いのか?)

表情そのものは穏やかだったが、熱のせいだろう、顔色はかなり赤い。

従姉妹とはいえ年頃の少女の部屋に黙って入室し、あまつさえ寝顔を覗いてるのだから、やはり居心地が悪い。

だが母親が出かけている以上、具合の悪い佳奈を置いて帰るわけにもいかない。

別にここにいなくとも居間かどこかで待っていればいいのだろうが、部屋を離れようという気にはならなかった。

純粹に佳奈を心配する気持ちと、ただ側にいたいという想いが混じり合う。

(俺、なにやってんだろな)

自嘲しつつ、適当に腰を下ろして佳奈母の帰宅を待つあいだ、涼太はじっと少女の寝顔を見つめ続けるのだった。

(熱い……)

佳奈が目を覚ましたのは、全身を襲う熱さのせいだった。

(あれ？ どうして私、寝てるの？ 今日は確か、リョータと一緒にプールに……ああっ!?)

覚醒し始めた脳が、ようやく今朝のことを思い出す。

(そうだ。私、熱を出して……)

不意に、瞳から涙が流れ落ちた。

身体が辛くてではなく、自分への情けなさによる涙だった。

(バカ……なにしてんのよ、私は……ッ)

ようやく漕ぎ着けた涼太とのデート(少なくとも佳奈はそのつもりだった)を、こんなことで棒に振った己の間抜けさに次々に涙が溢れ、枕を濡らす。

「うっ……うう……バカ……バカ……あ」

そのセリフは、もちろん自分自身へ向けたものだったが、

「見舞い客に対していきなりバカはないだろ、おい」

「ヒッ!？」

「悪態の次は悲鳴かよ。お前の中で俺がどんな評価されてるのか、一度きり話し合う必要があるな?」

確認するまでもなく、涼太だった。

なんで、とか、どうして、と訊ねるより先に、

「よお、気分はどうだ?」

涼太のほうから話しかけてくれる。

佳奈が泣いていたのは見ていたはずだし、その理由だって恐らく察しが

ついているだろう。それなのに、涼太はなにごともしなかったかのように明るい口調で話しかけてくれた。

その気遣いがわからない佳奈ではない。

「最悪。こんな状況でリョータの顔を見せられるなんて……ただの拷問だわ」

憎まれ口を叩きつつ顔を背ける佳奈だが、それは涙を見られたくないからではなく、この緩んだ口元を隠すためだ。

「おい、こっち向けて」

「あ」

強引に顔の向きを戻され、額に乗っていた濡れタオルも取られた。ひんやりとした手が佳奈の額に置かれる。

「あー、こりゃ駄目だな。熱、何度あった？」

「朝は三十八度二分だった」

「あれか、遊びに行くのが楽しみで眠れなかったか？ 興奮しすぎたか？」

「だ、誰がそんな……っ」

凶星を指摘されて思わず上体を起こそうとするが、すぐに涼太に押し止められる。

「こら、起き上がるな。寝てろ」

「リョータが変なこと言ったせいでしょ!？」

「俺、なんか言ったか？」

「か、勘違いしないでよね、これはただの夏風邪! 別に、アンタと遊びに行くのが楽しみで熱出したんじゃないからね!」

「どこのツンデレよ、と自分でツッコミたくなるようなセリフを吐いてしまおう。」

「夏風邪の時点でバカ確定ってわかってて言ってるんだよな？」

「……自分がバカってことくらい、イヤってほど知ってるわよ……っ」

「……？」

てっきり言い返してくるものと身構えていたのだろう、涼太は佳奈の予想外の反応に眉根を寄せて訝しんでいる。

「バカだもん……私、大バカだもん……っ!」

佳奈は涼太に背を向け、拗ね始める。

熱のせいかな普段より言動が子供じみていることは自分でもわかっているが、どうしようもないのだ。

(リョータのせいなんだから……私がこんなふうになつたの、全部リョータが悪いんだから……!)

また涙が出てきた。

「おい、佳奈……?」

心配そうな涼太の声に、さらに涙の量が増えてしまう。

涼太の手が佳奈の細い肩に置かれた。嬉しくて、また泣いてしまう。

(ダメだ。私、おかしくなってる。今、涼太になにか優しい言葉かけられたら、きっと私、言っちゃいけないこと言っちゃう……っ)

言っではいけない。けれど、言っではいけない感情が胸の奥で渦巻いている。

口にしてしまえば楽になれるかもしれない。

だが、それと同じくらいの確率で大切なものを失ってしまうかもしれない。

だから、佳奈はその言葉を伝えることができない。たった一言、「好

き」という言葉を。

そしてそれを告げるのは最後の手段だ。

できることならば、その言葉は涼太から言われたい。

「バカだもん……私、バカなんだもん……っ」

謔言のように繰り返しながら、布団の中に潜り込む。

「アンタみたいなダメ人間好きになった時点でバカ決定なんだから……！」

佳奈のその悲痛な言葉は掛け布団に吸い込まれ、涼太に届くことはなかった。

それから約一週間、涼太の部屋に佳奈が訪れることはなかった。

叔母である佳奈母からの電話によると、熱は下がったのだがまだ体調が戻りきってないらしい。

（佳奈のやつ、ああ見えて身体強くないからな。ん？ 見たとおりでいいのか？ まあ、どっちでもいいか）

相変わらず仕事は多かったので、佳奈のことを心配しつつも涼太は学校と自宅を往復する毎日を過ごしていた。今日も残業してきたところである。
(静かだな)

家に仕事を持ち帰って作業していると、ふと背後を振り返ってしまふことがあった。

だがそこに見慣れた少女の姿はない。涼太を罵る声もない。

それを寂しいと思った時点で負けだと強がるものの、そんなことを考えること自体、すでに敗北してるのだ。

しかし意地でも自らの負けを認めたくない元引きこもりの三十代独身男、(そろそろ、また見舞いに行つてやるか。寂しがってるだろうしな)
などと小賢しい言い訳を用意する。かなり潔くない。

「アンタ、可愛い教え子の見舞いもできないほど性根が腐つてたとはね」
けれど、幸か不幸か、明日を待たずに佳奈のほうから涼太の部屋を襲撃してきた。

「おう、久し振りだな。元氣そうじゃないか」

嬉しさを必死に押し隠しつつ、一週間ぶりの佳奈を見つめる。一瞥した

限りでは、特に変わったところはなさそうだった。

「誰かさんが邪魔しに来なかったおかげで、順調に快復できたわよっ」

「さっきのセリフと矛盾してるぞ？」

「イヤミよ、イヤミ！」

「わかってるけどさ」

いつもと同じ遣り取りに、二人同時にニヤリと笑う。

「んで、なにしに来たんだ？ 見舞いに来なかったことを糾弾しに来ただけじゃないだろ？」

「当たり前でしょ？ 用事もないのに、誰がこんなオタクの巣窟に足を運ぶもんですか！」

「いや、お前、用もないのに毎日入り浸ってんじゃないか」

オタクの巣窟であることは否定しない。

マンガもゲームも同人誌もフィギュアもドールもプラモもポスターも、涼太は特に隠すことなく部屋に陳列してある。十八禁のものは就職と同時に隠すようにはしたが（逆に言えば、それ以前は普通に置いてあったわけである）。

「いちいち細かいことうるさいわよ、リョータは。そんなだから女に振られんのよ」

「ぐっ……！」

涼太の一番扱られたくない過去に触れてくるのは、佳奈が不機嫌である証拠だった。

「なんだよ、見舞いに行かなかったこと、そんなに怒ってんのかよ」

「はぁ？ なに自惚れてんのよ、三十路超えて童貞のクセに」

かなり怒ってるようだった。

「私はね、リョータにもう一度チャンスをあげようって言ってあげてんのよ」

「チャンス？ なんのだ？」

「もう一度、私を誘わせてあげるってこと。それくらいもわからないの？」

ホント、気の回らない男ね。まあ、だから彼女も作れないんだろうけど？」

（あー、そういうことか）

恐ろしく回りくどい言い方だが、なにを伝えたいかは理解できた。

「ぶっちゃけた話、このあいだ行けなかったんだから、またどっかに誘えと？」

「そうとも言うわね。感謝しなさいよ、このダメ人間」

「なぜそこまで言われてまでお前を誘わにゃならんのだ？」

「ごちゃごちゃうるさいのよ、リョータのクセに！ オタクのクセに！」

「オタクにだって人権はあるぞっ」

「オタクにはあっても、リョータにはないのよっ！」

ひどい言われようである。

だがこんな会話のキャッチボール、もとい会話のサンドバッグであつても、心の底では楽しんでいる自分がいることを涼太は知っている。

そして同時に、いつか、恐らくはそう遠くない日にこの幸せな時間がなくなることも涼太は知っているのだ。

（一回り以上違うんだもんな、こいつとは）

ほとんど親子に近い年齢差である。

「……なに、いきなり黄昏れてんのよ。キモい」

汚いものを見るような目をされてしまって、ちょっとへこむ。

「せっかくのお誘いは嬉しいんだがな、」

「誘ってない！ 誘うのはアンタ！」

顔を赤くして抗議する佳奈を無視して続ける。

「実はもう、休みがないんだよな。このあいだのでまとめてお休みもらっちゃったし」

「土日があるでしょ!？」

「いや、それもダメ。研修が入った」

元々休日が少なかったことに加え、佳奈とのデート(?)の前後に有給を使ってしまったため、八月はもう休めなくなってしまったのだ。

そもそも夏休み自体、もうあと十日ほどしか残っていない。

そう告げると、佳奈はその細い身体をわなわなと震わせ、凄まじき形相で涼太を睨んできた。

けれどそれ以上なにも言ってこなかったのは、自分にも責任があることを一応はわかっていたせいだろう。

「……フン！」

「あ、佳奈？」

佳奈は忌々しげに鼻を鳴らすと、どすどすとこれ見よがしに足音を立てながら部屋を出て行ってしまった。

(手がかかるやつだな、本当に……!)

自分は悪くないと思いつつ、でもどうにかして時間をつくってどこかに連れて行こうなどとも考えながら仕事をしていると、

「……佳奈？」

つい二十分ほど前に帰ったはずの少女が再び涼太の私室に現れた。

「なんで制服？」

なぜか制服に着替えていた。

むくれた顔は変わらなかったが、その頬がほんのり赤く見えたのは気のせいだろうか。

「あのな、佳奈。なんとか時間をつくってみるから、またどっかへ、」
機嫌を直してもらおうと話しかけるが、

「いい」

佳奈は涼太の言葉を途中で遮る。

「いいの、もう。時間、ないし」

「そりゃ、夏休みもあとちょっとだし、俺も休みはないけど、」

「そういう意味じゃないから。たとえリョータが休みを取れても、もう遅すぎるから」

佳奈は思い詰めた表情を見せる。

「もうちんたらしてられないんだから……！」

なにやらぶつぶつ言い始めたが、涼太には意味がわからない。

「……………リョータ」

「な、なんだ？」

「リョータはオタクなんだよね？」

「否定はしない」

公言する必要はないが、隠す気もない。

「可愛い女の子、好きなんだよね？」

「否定はしない」

そもそも、嫌いな男子もそうそういないと思うが。

「じゃあ、ロリコンの変態、なんだよね？」

「否定はしない……わきゃねーだろ!？」

「じゃ、あそこにあるフィギュアとか、真ん中の本棚の奥に隠してあるエロマンガとか、パソコンにインストールされてるゲームはなんなのよっ」
「俺の個人情報だだ漏れ!？」

確かに、美少女フィギュアやら成年コミックやらエロゲはこの部屋に山ほどある。

「白スク水にニーソックスのフィギュアとか、つるぺた少女を愛でるマンガとか、双子の義妹を調教しちゃう鬼畜ゲームとか!？」

「しかもなんでそんなピンポイント!？」

涼太は確かに「そーゆー属性」もあるし、大好きだし、萌えちゃったりするが、

「他にもあるだろ、巨乳バニーフィギュアとか、未亡人ハーレムマンガとか、魔法少女が触手に襲われちゃうゲームとか!？」

「魔法少女、つるぺたじゃない!？」

「なぜお前がそれを知っている!？」 佳奈……恐ろしい子!？」

どうやら涼太の趣味嗜好はすべて把握されているらしい。

「アンタがそんなだから、私が苦労するのよ！ おかげで乳製品食べられなくなっただし！ 牛乳好きだったのに！」

「……俺の趣味とお前が乳製品食えなくなったことにどんな因果関係があるのか、イマイチ理解できないんだが」

「カルシウムが……って、うっさい！ くだらない女に振られたからって二次元に逃げ込んだヘタレは黙ってなさい！」

「うぐっ」

高校三年生のとき、ずっと好きだった同級生に告白して見事に玉砕し、そのショックで色々道を踏み外したのは事実である。

「キミって黙ってればカッコイイけど、中身、オタクだしね」

あの痛烈な言葉は今でも涼太の深い部分を苛んでいる。

「あんな、ちょっと顔が整ってて胸の脂肪が多くて腰がくびれてるだけの尻軽女に騙されるリョータがバカなのよ！」

「……わかってただけだな。あいつが俺をそういう目で見てるんだろうってことはさ。でも……あの頃は好きだったんだからしかたないだろう？」

あと少しで卒業って思ったたら、告白しないと後悔するって思ったんだ、あのときは」

「それで玉碎してトラウマこさえて受験に失敗してオタク趣味にのめり込んで留年して就職もせずにニートになって引きこもったクセに！」

「そりゃ事実だが、なんでお前にそこまで言われなきゃならぶっ!？」

かっとなって言い返そうとした涼太の顔面に、なにかが飛んできた。

(なんだ、これ？ 布か……?)

ほんのり温かくて甘い匂いのするそれが佳奈の制服だと気づくまで約五秒。

「な、な……なあああッ!? おまつ、なにを……ふごっ!？」

顔を上げた涼太の網膜がそれを捉え、さらにその情報を脳が処理し終わるまでに約十二秒かかった。

「……………なによ、バカリリョータ」

制服を脱ぎ捨てた佳奈が、上目遣いにこちらを睨んでいた。

「……………」

「なにか言いなさいよ。それとも、変態でロリコンのリョータには刺激が

強すぎて、言語中枢が麻痺でもしたの?」

罵倒がいつもより早口なのは、佳奈も恥ずかしいからだろう。

「……なんで水着? しかもスク水?」

佳奈は紺色のスクール水着にオーバーニーソックスという出で立ちだった。

小柄であり凹凸のない佳奈に、その水着はびっくりするほど似合っている。

白い肌と水着の紺が鮮やかなコントラストを描いていた。

「プールに行けなかったから、せめて水着姿くらいは見せてやろうって私の思い遣りがわからないの!？」

「いや、それだったら俺に買わせた水着があるだろ!？」

あの、泣きたくなるくらい値段の水着を佳奈は持っているはずだ。

「あれは……だって、せっかくリョータが買ってくれたんだもん。もったいないもん」

「だから……スク水なのか?」

「そうよ。リョータにはこっちのほうがイイんでしょ? ニーソだって脱

がないであげたんだから……感謝しなさいよね？」

「お前、俺をそんな変態みたいに……」

「事実でしょ？ それとも、ニーソ、脱ぐ？」

「ごめんなさい変態でいいです脱がないでください」

「……それだけ？ 他に言うことないの？ 別に、言葉じゃなくてもいいんだけど」

ちらりと、物欲しげに涼太を見る。

両手を後ろで組んで、もじもじしながら上目遣い。かなりの破壊力である。

(な、なんだなんだ! 今日このこいつ、おかしくないか!?)

エアコンが効いているはずなのにやたらと汗が出る。顔が熱い。

「……か、可愛いぞ？」

掠れた声で、どうにかそれだけを口にする事ができた。

「正直でよろしい。でも、それだけ？ 他には？」

「……えっと」

期待に満ちたその瞳と赤らんだ頬、そしてこのシチュエーション。

さすがに佳奈がなにを求めてるかくらいはわかる。
わかるが、それを口にできるはずもない。

「……………」

「……………」

「……………」

「……………意気地なし」

吐き捨てるように言われてしまった。

「まあ、しょせんはグズでグズでグダグダのリョータだしね。……いいわよ、このあいだのドタキャン、少しは悪いと思ってるし……その詫びも兼ねて、私のほうからお望みのセリフを言ってあげるわ」

それから、大きく二度ほど深呼吸。

「……アンタのこと、好きよ。グズでノロマで変態でロリコンでスケベで年寄りでは乳類として最低ランクだけど……拾ってあげるわ」

恐らくここまでひどい告白をされる人間も、世界中探してもそうはいないだろう。

けれど、涼太は嬉しかった。

と同時に、この少女の気持ちを受け取ってはいけないとも感じる。

「佳奈。お前の気持ちは嬉しいが、」

「うるさい！ うるさいうるさい！ うるさいいいいいッ!!」

「いや、お前のほうがうるさいぞ!」

「聞きたくない、見栄っ張りのダメ大人の言い訳なんて聞きたくないのよっ!」

佳奈は両手で耳を塞ぎ、涼太の建前に満ちた返答を拒絶する。

「私がここまでしてやってんだから、アンタも男を見せなさいよ！ それとも、こんなガキ相手にビビってんの!? そんなんだから、くだらない女に振られて人生棒に振るのよ!」

さすがに、かちんときた。

その感情が顔に出たのだろう、佳奈がさらに挑発してくる。

「はっ、怒ったの!? リョータのクセに！ いっちょまえに!」

「お前な……!」

思わず佳奈の腕を掴んでしまった。そのびっくりするほどの細い腕が小刻みに震えるのを知り、涼太は息を呑む。

「いいわよ、殴りなさいよっ。その代わりに、責任はとらせるからね！ 一生リョータにつきまとしてやんだから！……シンッ!？」

その脅えを含んだ潤んだ瞳を見た瞬間、涼太は佳奈の唇を強引に奪って
いた。

「んっ……んん……んんんー……っ！」

佳奈がなにか言いかけたが、その隙を衝いて舌を侵入させる。

抵抗は、なかった。

代わりに、細い両腕が涼太の背中に回された。

その腕は、もう震えてはいなかった。

(あー、やっちゃまった……しかも舌まで入れちゃまったよ、俺……っ)

一回り以上も歳下の少女の唇と舌を散々堪能し終えた涼太は、くったりともたれかかってきた佳奈を抱き締めながら、大量の脂汗を顔に浮かべていた。

(俺、もしかしなくても……やばい?)

親戚の少女、しかも教え子の唇を自室で奪う。それも、スク水でニーソである。端から見られたら、言い訳のしようがない状況だ。

「……佳奈？」

胸に顔を埋めたままの佳奈に声をかける。

「ふにゃ……？」

気怠そうに涼太を見上げたその蕩けた顔があまりに無防備だったので、もう一度キスしてしまった。

今度は佳奈も舌を動かしてきた。甘い唾液を纏った温かい粘膜が心地よすぎて、涼太は欲望のままに教え子の舌を犯した。

「りよ、リョータ……あ……っ」

たっぷり数分間のキスを終えて顔を離すと、互いの唇のあいだにねっとりとした唾の橋がかかっていた。佳奈の瞳からは一筋の涙も零れている。

「変態……リョータのロリコン……っ」

「ああ、変態だ。ロリコンだ。悪かったな。すまん」

「わかってないクセに……なにが悪かったわかってんの、アンタ……！」

「まあ、一応」

心当たりは山ほどある。

「なら、ちゃんと言いなさいよ。順番、逆じゃないのっ」

「……………」

そのたった一言を口にすることができない涼太は、それを誤魔化すために佳奈をベッドに押し倒す。

「ちよっ、こら！ バカリョータ！ その前にすることが……………ひゃああっ！」

ニーソックスに包まれた細い両足首を掴み、大きく左右に広げる。そしてV字開脚させた魅惑の股間に顔を突っ込み、ずっと夢想し続けてきた少女の秘部に鼻を押しつける。

「バ、バカっ、いきなりそこなの!? こら、がっつくな、このロリコン！ あっ、ダメ、ダメって言ってんでしょ、この変態い！ アツ……………アーツ！」

水着の上からでもわかるほどぶっくりとした恥丘を丸ごと口に含み、舌を這わせる。ざらりとしたスク水の感触と共に、ほのかに甘酸っぱい匂いが涼太の脳を震わせる。

(これが……これが佳奈のオマ×コ……!)

「ひゃああ! ひゃっ、ひゃあん! バカ……バカバカ……バカァ!」

ぽかぽかと頭を叩かれるが、それが本気の拒絶でないことは明らかだ。高々と掲げられたつま先がびくびくと反り返り、腰も時折浮き上がる。

(お? 匂いと味が強くなってきた……?)

鼻と舌が少女の微妙な変化を察知する。

「うううっ、変態……このダメ人間、ダメ大人……あ!」

ぐすぐすと泣きながら罵られると、余計にいじめたくなる。

もっと泣かせたい、そしてもっと罵倒されたいと思ってしまう。

まさにザ・ダメ人間。

「変態変態っ、リョータの変態……い! ああっ、ダメ、そこばかり舐

めるのダメええっ! ひっぐうウ!」

たっぷりと唾液を吸った水着はぴったりと肌に張りつき、佳奈の恥ずかしい部分の形状を浮かび上がらせている。紺色の生地越しに見えるその美しい縦スジに、涼太は目と心を奪われまくりだ。

「や、だ……涼太の目、エロいよお……っ」

「お、お前が悪いんだぞ!?　こんな……こんな可愛い格好して……我慢でき
るわきゃねーんだ!」

「変態い……スク水に欲情するなんて、リョータ、最低……っ!」

「だったら逃げろよ、抵抗しろよ!　俺、もう止まらねーぞ?　このまま
お前を……佳奈を俺の女にしちまうぞ……!」

もしも佳奈が本気で抗うならば、絶対にそこでやめるつもりだった。だ
が、佳奈がそんな素振りを見せないからここまでやってしまったのだ。

「俺、もう限界だから……これ以上は我慢できなくなるからなっ!」

このまま続けたら、きっと最後までしてしまおう。戻れないところまで踏
み込んでしまおう。

今が分水嶺なのだ。引き返すならここしかない。

「す、好きにすればいいでしょっ。最初から……アンタに全部あげちゃう
つもりだったんだから……!」

ぷい、と顔を横に背ける佳奈の耳は、食べてしまいたくなるほどに真っ
赤だった。

「佳奈っ!」

涼太は最後に残しておいた理性を放り投げ、スク水少女にのしかかる。「ああっ！ やだやだ、こんなのはやだァ！ リョータのバカ、アホ、スケベ！」

火照った耳たぶや首筋に唇を押しつけ、水着の上から控えめな膨らみを揉む。

「やらっ、耳のなかは……ひっ！ あっ、あはああっ！」

口ではやだやだ言いつつも、佳奈の両腕は涼太の首に巻きついている。

「佳奈……佳奈……！」

濡れた瞳、カールした柔らかい髪、唾液まみれの唇、愛らしく染まった頬、真っ赤な耳たぶ、ささやかな胸の膨らみ、水着に浮かんだ二つの尖り、透けて見えるワレメ、じっとり汗をかいた白い絶対領域、そして細い脚を包み込むニーソックス。

そのすべてが涼太を誘惑し、魅了し、そして熱狂させる。

「リョータ、リョータ……あーっ、あっ、ああーっ！」

両手をばんざいさせて、甘い汗を湛えた腋の下を舐める。

それと並行して、たっぷり唾を染み込ませた股布に指を這わせ、魅惑の

縦スジを上下に撫でる。

「ひっ、ン……………あ、あああ……………リョータ、の、指、やらし……………っ……………は
ウ！」

「やらしいのはお前のマ×コだろ？　こんなに熱くしやがって」

佳奈のそこは、唾液以外の汁でぐっちよりと湿っていた。指を上下に動かすたびにぐちゅぐちゅと粘り気のある水音が立つ。

「ち、がう……………リョータが、エッチな触り方、する、からあ……………ひゃは
ア！」

指がクリトリスを捉えたらしく、佳奈はびくりと腰を浮かばせた。

(たっまんねえ……………こいつの感じてる顔、エロ可愛すぎだっ……………！)

次から次へと口内に生唾が溢れて止まらない。

股間のイチモツは痛みを覚えるほどに勃起し、このまま放っておけば射精してしまうかもしれない。

「……………苦しいの？　リョータのそれ」

ズボンの膨らみを見た佳奈が、恐る恐る涼太の股間に手を伸ばす。器用にチャックを下ろした途端、

「ヒッ！」

はち切れんばかりに膨張した愚息が飛び出してきた。

「こ、この、この……っ、スケベ変態犯罪者社会不適合者ろくでなし！
し、信じられない、私の水着見ただけでこんなに発情して硬くしておっ
きくしてガマン汁垂れ流してビクビクさせてるなんて！」

「……そう言いつつなんで俺のチ×ポを握ってんだ、お前」

佳奈は両手で包み込むように勃起を握っていた。血走った目は瞬きもせず涼太のペニスを凝視している。

「さ、最低っ。リョータ、最低よ！こ、こんな太いの挿れるつもりだったの!? 信じられないっ。無理、絶対に無理っ！」

などと騒いでるのに、両手は忙しなく肉棒を撫でたりいじったりさすったりしている。

「じゃあ、やめるか？」

「なっ!? そ、そんな気もないクセに！ い、いいわよ、好きにすればいいじゃないっ。アンタのこのダメ大人チ×ポで、教え子の処女奪えばいいじゃないっ！」

自ら腰を動かし、亀頭に秘部を擦りつけてくる。スク水の股布部分はそこだけ黒く変色し、大量の愛液を吸ったことを示していた。

「いいのか？ ホントにぶち込むぞ？ 佳奈の処女、本気でいたただくからな？」

水着を横にずらし、佳奈の花弁を剥き出しにする。

髪と同じ僅かにカールした秘毛は薄く、蜜で濡れそぼったクレヴァスは丸見えだった。

「すっ好きにしろって言ったわよ……くっ……」

誰にも見せたことのないであろう秘唇を露わにされた佳奈は羞恥に声を震わせる。

ピンク色の小さな陰唇は僅かにほころび、その奥に守られた狭穴から溢れた透明な雫で濡れ光っていた。

（これが佳奈のオマ×コか……。やっぱ小さいな。こんなところに入るのか？）

両手の親指を使って小陰唇を左右に広げると鮮やかな色の膣粘膜が現れた。

まだ半分包皮を被った米粒くらいの陰核と、ヒクヒクと蠢く狭い窄まりは確認できたが、尿道口はよくわからなかった。それくらいに小さな女陰だったのだ。

「い、いつまで見てるのよ……す、するならさっさとしなさいよ、バカ……！」

佳奈が涙目でこちらを睨んでいる。けれど、その表情にいつもの陰はない。

「……痛がってもやめねーからな？」

「か、勝手にしなさい……ぐウ!？」

この辺りか、と見当をつけていきり立った肉鉗を狭穴にねじ込む。

どうせ処女と童貞なのだ、下手に苦しむ時間を長引かせるよりはと、短期決戦を目論む。

(ここか？　ここが膣口か？)

亀頭の先端が僅かな窪みを察知する。かすかに蠢くその窄まりが佳奈の入口だと思うと、その昂ぶりだけで射精してしまいそうになった。

「……挿れるぞ」

佳奈はなにも答えず、目を瞑り、両手で涼太のシャツを握り締めた。

「……………ッ！……………ッ！……………ッ！……………ッ！！」

涼太が一気に腰を突き出した瞬間、佳奈が声にならない悲鳴を上げる。小さな両手がシャツ越しに涼太の背中に爪を立てる。

ニーソックスに包まれた両脚が大きく宙を蹴り上げる。

「ヒッ……………ヒッ……………！」

破瓜の激痛から逃れようと身をよじるが、それも無駄な抵抗に過ぎない。

「キッ……………い……………！」

佳奈の痛みには及ばないものの、涼太もまた、この狭すぎる膣道の締めつけに呻き声を漏らす。

苦しみを長引かせぬよう一度のピストンで貫通させた方がいいが、入口付近と膣奥周辺の凄まじいまでの締め上げに涼太は青息吐息だった。

（なんなんだよ、これ!? 気持ちよすぎるのに、締めつけキツすぎて動けねえ!?)

初めて知る膣粘膜は想像していたよりずっと熱く、ぬるぬるしていた。これならば数分もたずに射精してしまいそうだ。

「お、おい佳奈、もうちょっと力抜けて！ これじゃ動けねえって！」
「む、りい……ひっ……痛いんだからあ……ああっ、壊れちゃう……リョ
ータに殺されちゃう……がむっ」

「おおうッ!？」

激痛の仕返しなのか、ただ気を紛らわすためだったかは不明だが、佳奈が肩に噛みついてきた。甘噛みなどというレベルではなく、本気で歯を立ててくる。

「うーっ、うっ、ううーっ！」

噛みながら、さらに腕に力を入れて涼太にしがみついてくる。瞑った目からはぽろぽろと大粒の涙がこぼれる。

かなり痛むようだが、佳奈はもう逃げようとはしなかった。

「悪い。すぐに終わらせるから、もうちょっとだけ力を抜いて、あと少しだけ我慢してくれ」

耳元で囁くと、佳奈はこくこくと頷く。肩に噛みついたままだったので地味に痛い、破瓜の痛みを考えれば文句は言えない。

左手を佳奈の後頭部に回して支えるように抱き締め、右手は水着の上か

ら乳房を優しく揉む。

「ふーっ、ふっ、ふっ、ふー……っ！」

佳奈の荒い鼻息を首筋に感じながらじっと待っていると、ほんの僅かではあったが膣壁の締めつけが緩んだ。

「動くぞ、佳奈……！」

この一瞬の隙を逃してなるものかと、涼太はピストンを開始する。

「アアアッ！ アッ、ダメ……あっ、あーっ！」

貫通したばかりの肉壁を容赦なく勃起が抉る。

「ヒイイ！ やっ、激し……あーっ、ダメ、もっと優し……ン……ッ！」

上半身で佳奈の身体を押さえつけながら、腰だけを動かして膣道を貫く。

「リョータ、リョータ……あ！ うあっ、あっ、あああ！ はあぁっ！」

佳奈の嗚咽も、今の涼太には興奮を増加する甘い喘ぎ声にしか聞こえない。否、涼太や当の本人も気づいてはなかったが、佳奈の声には挿入直後に比べて僅かにはあったが甘えるような響きが混じり始めていた。

「ううっ、リョータの、太い……っ……ダメ……お腹っ、奥まで……ハア

ッ

少しでも早く射精して終わらせようと、涼太の抽送はどんどん加速していく。

そしてそれに比例して、佳奈の漏らす声も大きくなっていく。

「ンッ、ンウッ、ンン……ッ！」

自らの発する声の変化に気づいたのだろう、佳奈は涼太のシャツを噛んで必死に堪えるが、力強さを増す突き上げの前には儂い抵抗でしかなかった。

「お、おかしいのっ、リョータ、わた、ひっ、なんだかおかしくなっ……ひうッ！」

浅い膣道を肉棒で埋め尽くされ、亀頭で荒々しく子宮口を揺さぶられる。破瓜の痛みが徐々に引く一方、佳奈の若い肉体は急激に女として開花しつつあった。

「あっ、ダメ……ダメ、リョータ、怖い……あっ、変にな……ハアア！」

「か、佳奈!？」

両腕に加え、両脚までもが涼太に巻きつく。

いよいよ爆発のときが迫っていた涼太は焦るが、佳奈の女体は精子をおねだりするかのようには腫脹を蠢かせ、勃起を締め上げる。

「お、おい佳奈、脚、脚っ。俺、もう出るぞ!？」

「出しちゃダメ、中出しなんて絶対にダメえ！ 殺すからっ、奥で射精なんかしたら、死ぬまで許さないんだからあ！ リョータのバカ、変態、ロリコンっ!!」

言葉とは裏腹に、佳奈は両足首をロックして涼太の腰を拘束する。

「バカチ×ポ、バカチ×ポお！ 嫌いっ、リョータなんか大嫌いっ！ 出すな、私のオマ×コに精子なんか出すなあ！ このダメ大人あ!!」

そんな罵声を浴びせつつ、ときおり涼太の首筋や胸板に唇を押し当て、キスマークをつけていく。

「くっ……マジでやばいんだって！ 出ちまうって!」

腫脹の締めつけが、それまでの拒絶するような締めつけから、奥へと引き込むような蠢きへ変化していた。白っぽい愛液が多量に分泌され、ピストンが楽になったことも射精を近づける。

(さ、さすがに中出しはまずいだろ、俺!?)

必死に腰を引いてペニスを抜こうとするのだが、この小さな身体のどこにそんな力があるのかというほどに佳奈のロックは堅牢だった。

「バカリョータ、バカリョータあ！ やあっ、あっ、ダメ、中出ししたら許さないっ……あっ、あっ、ああ……!!」

「うおお!？」

佳奈の身体がびくびくと痙攣を始めると同時に、膣が収縮する。

「やっ……やだやだ……らめえ……リョータ……リョータあ……バカ……っ!!」

涼太を罵りながら、佳奈が絶頂に向けて上昇していく。

真っ赤な顔で自分にしがみつく少女の健気さが涼太の最後の抵抗を打ち砕く。

「ぐあ……ッ」

野太い呻き声と同時に、堪えに堪えていたマグマを佳奈の最深部に解き放つ。

全身の毛穴が開くような絶頂感に、涼太は一瞬意識が遠のく。



「アーツ、熱い……熱いのが奥に……っ……ひっ……はひ……イ!!」

子宮口を焦がすような灼熱の一撃に、処女を喪ったばかりの少女が絶叫する。

ぎりぎりとした涼太の背中に爪を立て、胎内を犯すザーメンの熱さにその小柄な肢体を激しく痙攣させる。

「ダメ……出し過ぎ……溶け、る……ダメ精子、多過ぎ……い……っ」

初めての膣内射精の衝撃が収まるまでのあいだ、佳奈はずっと涼太にしがみついたままだった。

「バカ! 変態! 犯罪者! 暴行魔! 女の敵! ろくでなし!」

「あー、はいはい」

「なに、そのふざけた態度は!? アンタわかってんの、これ犯罪なのよ!?!」

「わかってるよ。反省してるって」

「してない! 反省しろ、このダメ大人! 去勢するわよ!?!」

「あー……あのさ、そろそろ解放してくんないか？」

射精してからすでに小一時間が経過していたが、佳奈は涼太にしがみつくのをやめていなかった。

すでに数え切れないほど謝ったし反省の言葉も繰り返したのだが、佳奈が許してくれる気配はなかった。

(なんなんだよ、もう……)

ただ甘えているだけでなく、佳奈はなにかを求めているのだということはおわかる。

それはわかるのだが、なにが自分に求められているのかがわからない。

頭をなでなでしたり、おでこや頬、さっきは唇にもキスをしたが、どうやらそれでもないらしい。

「こ、この程度で誤魔化されないんだからね！」

喜んでくれたようだったが。

(んー……どうしたもんか)

途方に暮れる涼太に、このままではいつまで経っても要求は満たされないと判断したのだろう、遂に佳奈がヒントを出してくれた。

「ホントーにアンタは最低最悪ダメ人間ね」

「反省してます」

「反省だけならボルボックスだってできるっ」

「俺、いよいよ藻扱いかよ……」

「順番すっ飛ばすような性犯罪者は光合成でもしてればいいのよッ」

「順番？……あ」

涼太はようやく気づいた。

「ふんっ、遅い！ だからアンタはその歳まで童貞だったのよ、変態リョータ！」

「悪かったよ。でも、俺はよかったと思ってるぜ？ 魔法使いにはなれなかったけど、一番最初の相手が佳奈になったからな？」

「こ、これは違うわよっ。無理矢理だからノーカウント！」

そう言いながら、涼太の胸に頬をすりすりしてくる佳奈。

「順番があとになっちまったな」

「な、なによ。珍しく真面目な顔しちゃって……」

「好きだ、佳奈」

期待に目元を赤らめた少女の瞳を見つめながら、涼太は一生言わないつもりだったセリフを告げた。